

複素多様体

Hans

定義 1(概複素構造)

実 $2n$ 次元多様体 M の点 p の局所座標系 (x_1, \dots, x_{2n}) について, $T_p(M)$ の一次変換 J_p を, $J_p^2 = -\text{id}$ となるように定める. $T_p(M)$ の基底 $\left\{ \left(\frac{\partial}{\partial x_1} \right)_p, \dots, \left(\frac{\partial}{\partial x_{2n}} \right)_p \right\}$ に関する J_p の表現行列を $(J_{ij}(p))_{ij}$ として, この各成分が C^∞ -級であるとき, 対応 $J: M \ni p \mapsto J_p \in \text{End}(TM)$ を **概複素構造** と呼ぶ.

(注意) 概複素構造が定められない場合もある. 例えば, S^4 には, このような構造は定まらない.

定義 2(概複素多様体)

概複素構造を持つ実 $2n$ 次元 C^∞ -級多様体 M を, 概複素多様体という.

命題 1

概複素多様体 M について, 以下の 2 条件は同値である:

- (i) M の開被覆 $\mathcal{U} = \{U_\alpha\}_{\alpha \in A}$ が存在して, 各 U_α 上の局所座標系 $(x_1, \dots, x_n, y_1, \dots, y_n)$ で, 任意の $p \in U_\alpha$ で, 以下の式が成立する:

$$\begin{cases} J_p \left(\frac{\partial}{\partial x_k} \right)_p = \left(\frac{\partial}{\partial y_k} \right)_p \\ J_p \left(\frac{\partial}{\partial y_k} \right)_p = - \left(\frac{\partial}{\partial x_k} \right)_p \end{cases} \quad (1)$$

- (ii) M は複素多様体である.

(証明) (ii) \implies (i) については、 M が複素多様体ならば、後に示す命題 2 より、式 (1) を満たすような複素構造 J を取ることができるので、明らかである。(i) \implies (ii) を示す。 $\alpha, \beta \in A$ について、 U_α, U_β の局所座標系を、それぞれ $(x_1, \dots, x_n, y_1, \dots, y_n), (u_1, \dots, u_n, v_1, \dots, v_n)$ とする。 $U_{\alpha\beta} := U_\alpha \cap U_\beta \neq \emptyset$ の時、 $U_{\alpha\beta}$ での座標変換を

$$\begin{aligned}u_k &= \varphi_k(x_1, \dots, x_n, y_1, \dots, y_n) \\ v_k &= \psi_k(x_1, \dots, x_n, y_1, \dots, y_n)\end{aligned}$$

とすると、 $p \in U_{\alpha\beta}$ で、

$$\begin{aligned}\left(\frac{\partial}{\partial x_i}\right)_p &= \sum_{j=1}^n \frac{\partial \varphi_j}{\partial x_i}(p) \left(\frac{\partial}{\partial u_j}\right)_p + \sum_{j=1}^n \frac{\partial \psi_j}{\partial x_i} \left(\frac{\partial}{\partial v_j}\right)_p \\ \left(\frac{\partial}{\partial y_i}\right)_p &= \sum_{j=1}^n \frac{\partial \varphi_j}{\partial y_i}(p) \left(\frac{\partial}{\partial u_j}\right)_p + \sum_{j=1}^n \frac{\partial \psi_j}{\partial y_i} \left(\frac{\partial}{\partial v_j}\right)_p\end{aligned}$$

となるので、これに J_p を作用させると、

$$\begin{aligned}\left(\frac{\partial}{\partial y_i}\right)_p &= \sum_{j=1}^n \frac{\partial \varphi_j}{\partial x_i}(p) \left(\frac{\partial}{\partial v_j}\right)_p - \sum_{j=1}^n \frac{\partial \psi_j}{\partial x_i} \left(\frac{\partial}{\partial u_j}\right)_p \\ \left(\frac{\partial}{\partial x_i}\right)_p &= - \sum_{j=1}^n \frac{\partial \varphi_j}{\partial y_i}(p) \left(\frac{\partial}{\partial v_j}\right)_p + \sum_{j=1}^n \frac{\partial \psi_j}{\partial y_i} \left(\frac{\partial}{\partial u_j}\right)_p\end{aligned}$$

が得られる。(続く)

(証明続き) ここで, $z_k = x_k + \sqrt{-1}y_k$, $w_k = u_k + \sqrt{-1}v_k$ と置いて, $u + \sqrt{-1}v \in T_p^{\mathbb{C}}(M)$ について,
 $J_p(u + \sqrt{-1}v) = J_p u + \sqrt{-1}J_p v$ で, J_p の作用を定めると, 前のスライドで見た $\left(\frac{\partial}{\partial x_i}\right)_p$, $\left(\frac{\partial}{\partial y_i}\right)_p$ の 2 通りの
 表示を見比べると, $T_p(M)$ の基底の一次独立性から,

$$\begin{aligned}\frac{\partial \varphi_j}{\partial x_i}(p) &= \frac{\partial \psi_j}{\partial y_i}(p) \\ \frac{\partial \psi_j}{\partial x_i}(p) &= -\frac{\partial \varphi_j}{\partial y_i}(p)\end{aligned}$$

が, 任意の $p \in M$ で成立するが, これは Cauchy-Riemann の関係式に他ならない. よって, $\varphi + \sqrt{-1}\psi$ は正則関数になるので, M は複素多様体である. □

命題 2

M を複素多様体とする. この時, 概複素構造 J で, 式 (1) を満たすものが存在し, これは局所座標系の取り方によらない.

(証明) 存在については, M 開集合 U 上のある局所座標系 (z_1, z_2, \dots, z_n) , について, $J_p \in \text{End}(T_p^{\mathbb{C}}(M))$ を,

$$\begin{cases} J_p \left(\frac{\partial}{\partial z_k} \right)_p = \sqrt{-1} \left(\frac{\partial}{\partial \bar{z}_k} \right)_p \\ J_p \left(\frac{\partial}{\partial \bar{z}_k} \right)_p = -\sqrt{-1} \left(\frac{\partial}{\partial z_k} \right)_p \end{cases}$$

と定義すると, $x_k := \frac{1}{2}(z_k + \bar{z}_k)$, $y_k := \frac{1}{2\sqrt{-1}}(z_k - \sqrt{-1}\bar{z}_k)$ について, 式 (1) を満たすことから, 明らかである.

(続く)

(証明の続き) 次に, 複素構造 J が局所座標系によらないことを示す. $u, v \in T_p(M)$ として, $u + \sqrt{-1}v \in T_p^{\mathbb{C}}(M)$ について, $J_p(u + \sqrt{-1}v) = J_p u + \sqrt{-1}J_p v$ と定義する. この時, 以下の式が容易にわかる:

$$\begin{cases} J_p \left(\frac{\partial}{\partial z_k} \right)_p = \sqrt{-1} \left(\frac{\partial}{\partial \bar{z}_k} \right)_p \\ J_p \left(\frac{\partial}{\partial \bar{z}_k} \right)_p = -\sqrt{-1} \left(\frac{\partial}{\partial z_k} \right)_p \end{cases}$$

このことから, w が z_k (resp. \bar{z}_k) の一次結合でかけるとき, $J_p w = \sqrt{-1}w$ (resp. $J_p w = -\sqrt{-1}w$) となることがわかる.

局所座標系 $(x_1, \dots, x_n, y_1, \dots, y_n)$ が定義されている開集合内の開集合 U に, 別の座標系 $(u_1, \dots, u_n, v_1, \dots, v_n)$ が定義されているとする. さらに, $w_k = u_k + \sqrt{-1}v_k$ として, I_p を, 座標系 $(u_1, \dots, u_n, v_1, \dots, v_n)$ に関して式 (1) を満たすものとする. この時, J_p と同じ方法で I_p を複素化することで, 先ほどと同様にして,

$$\begin{cases} I_p \left(\frac{\partial}{\partial w_k} \right)_p = \sqrt{-1} \left(\frac{\partial}{\partial \bar{w}_k} \right)_p \\ I_p \left(\frac{\partial}{\partial \bar{w}_k} \right)_p = -\sqrt{-1} \left(\frac{\partial}{\partial w_k} \right)_p \end{cases}$$

が得られる. 一方で, U 上で,

$$\begin{aligned} z_k &= F_k(w_1, \dots, w_n) \quad (k = 1, 2, \dots, n) \\ \left(\frac{\partial}{\partial w_k} \right)_p &= \sum_j \frac{\partial F_j}{\partial w_k}(p) \left(\frac{\partial}{\partial z_j} \right)_p \\ \left(\frac{\partial}{\partial \bar{w}_k} \right)_p &= \sum_j \overline{\frac{\partial F_j}{\partial w_k}}(p) \left(\frac{\partial}{\partial \bar{z}_j} \right)_p \end{aligned}$$

となり, 特に, $\left(\frac{\partial}{\partial w_k} \right)_p$ (resp. $\left(\frac{\partial}{\partial \bar{w}_k} \right)_p$) は $\left(\frac{\partial}{\partial z_j} \right)_p$ (resp. $\left(\frac{\partial}{\partial \bar{z}_j} \right)_p$) の一次結合で表されることがわかるので,

$I_p = J_p$ がわかる

定義 3(概正則写像)

M, N を概複素多様体, J_M, J_N を, それぞれ M, N の概複素構造とする. この時, 可微分写像 $\varphi : M \rightarrow N$ が**概正則写像** (pseudo-holomorphic map) であるとは, 以下の式が成立することである:

$$d\varphi \circ J_M = J_N \circ d\varphi$$

定義 4(概複素同型)

概複素多様体 M, N が**概複素同型**であるとは, 概正則写像 $\varphi : M \rightarrow N$ および, $\psi : N \rightarrow M$ が存在して, $\varphi \circ \psi = \text{id}_N$, $\psi \circ \varphi = \text{id}_M$ が成立することである.

概複素多様体 M および, その概複素構造 J について, ベクトル場 $X \in \Gamma(T^{\mathbb{C}}M)$ が, 各点 p において, $J_p X_p = \sqrt{-1}X_p$ (resp. $J_p X_p = -\sqrt{-1}X_p$) を満たす時, X は**正則型** (resp. **反正則型**) であるという. T^+M (resp. T^-M) を, **正則接束** (resp. **反正則接束**) という. この時, 直和分解

$$T^{\mathbb{C}}M = T^+M \oplus T^-M$$

が成立する.

定義 5(積分可能性)

$A, B \in \Gamma(T^+M)$ について, $[A, B] \in \Gamma(T^+M)$ となる時, 概複素構造 J は**積分可能** (integrable) であるという. これは, 概複素構造 J の定める接分布 $T^+(M)$ が積分可能であることと同値である (Frobenius の定理). また, 積分可能な概複素構造を**複素構造**という.

(例) S^6 には積分可能でない概複素構造が定義される.

定義 6(Nijenhuis テンソル)

$X, Y \in \Gamma(TM)$ について, Nijenhuis テンソル $N(X, Y)$ を, 以下の
ように定義する:

$$N(X, Y) = [JX, JY] - [X, Y] - J[X, JY] - J[JX, Y]$$

定理 (Newlander, Nirenberg)

概複素構造 J が積分可能であることと, 任意の $X, Y \in \Gamma(TM)$ について, $N(X, Y) = 0$ となることは同値である.

(証明) 任意の $X, Y \in \Gamma(TM)$ について, $N(X, Y) = 0$ を仮定する. この時, $X, Y, X', Y' \in \Gamma(TM)$ について, $A = X + \sqrt{-1}Y$, $B = X' + \sqrt{-1}Y'$ とおくと, N を複素化 (線形拡張) することで,

$$N(A, B) = N(X, X') - N(Y, Y') + \sqrt{-1}(N(X, Y') + N(Y, X')) = 0$$

が得られるので, 任意の $A, B \in \Gamma(T^{\mathbb{C}}M)$ について, $N(A, B) = 0$ である. ここで, $A, B \in \Gamma(T^+M)$ とすると,

$$N(A, B) = 2\sqrt{-1}(\sqrt{-1}[A, B] - J[A, B]) = 0$$

となるので, $J[A, B] = \sqrt{-1}[A, B]$ となる. つまり, $[A, B] \in \Gamma(T^+M)$ となるので, J は積分可能である.

次に, J が積分可能であると仮定すると, 任意の $A, B \in \Gamma(T^+M)$ について, $[A, B] \in \Gamma(T^+M)$ である. ここで, $T^{\mathbb{C}}M = T^+M \oplus T^-M$ および N の双線型性から, A, B が, それぞれ $\Gamma(T^+M), \Gamma(T^-M)$ のいずれかの元である場合についてのみ示せば良い.

- $A, B \in \Gamma(T^+M)$ の時, $J[A, B] = \sqrt{-1}[A, B]$ に注意すると,

$$\begin{aligned} N(A, B) &= [\sqrt{-1}A, \sqrt{-1}B] - [A, B] - J[A, \sqrt{-1}B] - J[\sqrt{-1}A, B] \\ &= (-1 - 1 + 1 + 1)[A, B] = 0 \end{aligned}$$

となる.

- $A \in \Gamma(T^+M)$, $B \in \Gamma(T^-M)$ とすると,

$$\begin{aligned} N(A, B) &= [\sqrt{-1}A, -\sqrt{-1}B] - [A, B] - J[A, -\sqrt{-1}B] - J[\sqrt{-1}A, B] \\ &= (1 - 1)[A, B] + \sqrt{-1}(1 - 1)J[A, B] = 0 \end{aligned}$$

となる.

(証明の続き)



- $A \in \Gamma(T^-M)$, $B \in \Gamma(T^+M)$ の時,

$$\begin{aligned} N(A, B) &= [-\sqrt{-1}A, \sqrt{-1}B] - [A, B] - J[A, \sqrt{-1}B] - J[-\sqrt{-1}A, B] \\ &= (1 - 1)[A, B] - \sqrt{-1}(1 - 1)[A, B] = 0 \end{aligned}$$

- $A, B \in \Gamma(T^-M)$ の時, $J[A, B] = -\sqrt{-1}[A, B]$ に注意して,

$$\begin{aligned} N(A, B) &= [-\sqrt{-1}A, -\sqrt{-1}B] - [A, B] - J[A, -\sqrt{-1}B] - J[-\sqrt{-1}A, B] \\ &= (-1 - 1 + 1 + 1)[A, B] = 0 \end{aligned}$$

よって, 任意の $A, B \in \Gamma(T^{\mathbb{C}}M)$ について, $N(A, B) = 0$ が示されたので, 特に, $X, Y \in \Gamma(TM)$ についても, $N(X, Y) = 0$ が成立する. □

-  植田一石. (2015). 数物系のためのシンプレクティック幾何入門 (初版.). 東京都: サイエンス社.
-  松島与三. (2017). 多様体入門 (新装第 1 版.). 東京都: 裳華房.